



## 先天性甲状腺機能低下症の早期発見に関する研究

千葉大学医学部小児科 中 島 博 徳  
 牧 野 定 夫  
 猪 股 弘 明  
 露 崎 俊 明  
 佐々木 望  
 新 美 仁 男

### 1. クレチン症の全国実態調査

全国の医科大学、臨床研修病院、204施設に対し、昭和52年12月以前5年間に診療されたクレチン症につき、初診時年齢（治療開始年齢）、検査成績、病因、治療状況、治療後の身体発育、知能、学業成績、生活状況、など24項目に亘るアンケート調査を行った。

〔調査結果〕 204施設中、返信を戴いた131施設の中、クレチン症を診療した施設は99

で、この中75施設より497名(男183、女313)の調査表を受理した。初診時年齢は年次的に若くなる傾向がみられたが、最近4年間でも、生後3カ月以上は75%以上、1年以上は60%以上も存在した。初診時年齢とIQ(又はDQ)の関係は、生後3カ月以前は3カ月以後に比し有意にIQは高かったが、3カ月以前でもなおIQ90以下が40.7%、IQ75以下が25.9%も存在した。3カ月以後ではIQ90以下が73.1%、IQ75以下が42.2%であった。学業成績は、成績普通、少し悪い、非常に悪い、は夫々29.9、31.4、38.7%であった。

病型別では、甲状腺欠損性、異所性、ホルモン合成障害、その他(含不明)、は夫々29.0、29.4、15.1、26.5%で、欠損性、異所性何れも(女>男)を認めた。欠損性の学業成績は異所性+合成障害よりも低かった。

今回の実態調査の結果からみても、早期診断の為のマスクリーニングが必要であることが痛感された。

## 2. マスクリーニングで発見されたクレチン症の治療経過

入江・成瀬らによるスクリーニングで発見されたクレチン症5例(治療開始時5~10週)の治療成績を検討した。治療には $l-T_4$  5 $\mu\text{g}/\text{kg}/\text{日}$ で開始し、1週後3例(A)は10 $\mu\text{g}/\text{kg}/\text{日}$ として維持量とし、1例(B)はそのままを維持量とし、1例(C)は10→15→10 $\mu\text{g}/\text{kg}/\text{日}$ とした。

〔結果〕 1) 治療初期の副作用は全例に異常を認めず、2) 血清 $T_3$ → $T_4$ →TSHの順に正常化し、 $rT_3$ は初期に $T_4$ 、 $T_3$ と共に増加するがその後関連した動きを認めず、3) 維持量の検討では、(A)の3例は10 $\mu\text{g}/\text{kg}$ (40→85 $\mu\text{g}$ )/日によって $T_4$ 、 $T_3$ は正常~若干高値、TRH testは無反応であったが、骨年齢、身長は正常範囲で、DQも9~12カ月で正常であり、(B)は無症状だったので5 $\mu\text{g}/\text{kg}$ (25→45 $\mu\text{g}$ )/日で維持し、 $T_4$ 、 $T_3$ 、TRH test共に正常だったが身長増加速度の正常化が(A)に比べ遅かった。(C)は初期の成長、TSH正常化を早める目的だったが治療2週の時点で既に正常化していた。以上、全例に副作用なく、維持中も正常発育、発達を示したが、TRH testは10 $\mu\text{g}/\text{kg}/\text{日}$ で抑制された。

## 3. 母乳中の甲状腺ホルモン量

母乳中の有効甲状腺ホルモン量が問題になっているが、competitive protein binding assay 又は radioimmuno assay による測定値に疑問があるので、ラットを用い、食餌中に混じたPTUのgoitrogenic effect に対する母乳の抑制効果を甲状腺重量及び組織像を以て判定した。その結果母乳中にはクレチン症を改善するに足るホルモン量は含まれていないと結論された。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

#### 1. クレチン症の全国実態調査

全国の医科大学、臨床研修病院、204 施設に対し、昭和 52 年 12 月以前 5 年間に診療されたクレチン症につき、初診時年齢(治療開始年齢)、検査成績、病因、治療状況、治療後の身体発育、知能、学業成績、生活状況、など 24 項目に亘るアンケート調査を行った。